

先週の回答

疑心暗鬼



「ぼくは真実（ほんと）にパパの子なんですか？」
 「藪から棒に何を言うんだ」
 「パパの子じゃないような気がするんです」
 「どのへんが？」
 「ぼくの目はつぶらで鼻スジがとおっているけど、パパの目は点で鼻はややおっぴらいているでしょう。ぼくには冷静で判断力があるけど、パパはおっちょこちよいで場当たりのいい加減。ぼくはほとんどの漢字が読めるのに、パパはほとんどの漢字が読めない。ぼくは女性を選び好みするけど、パパは女ならだれでもいい」
 「うたがっているのか？」
 「そんなパパからぼくのような子が生

まれるとは思えないんです」
 「疑心暗鬼はいかん。『疑心暗鬼を生ずる』といって、うたがいの気持ちを持っていると、暗がりに、いるはずのない鬼がいると思ひ込んでしまう」
 「うたがいの気持ちは持っていますが、暗がりに鬼がいるとおもいません」
 「うたがう気持ちがあると、何でもないことまでうたがわしく感じてしまうんだよ」
 「何でもないことはうたがってません。ぼくはパパの子ではないとうたがっているだけです」
 「あんたがパパの子であるのはまちがいないわよ」と、ママ登場。
 「まちがいないけど、情けないって気持ちになるのはわかるわよ」



